

井上靖記念文化財団

星闌干

井上 靖

歳。これから新しい時代・、平成、 私は明治四十年生れ。明治、 大正、 へのスタートを切る。 昭和の三代を通過して、 いまは八十一

言ってみれば、天体の入口とでもいったような所に置かれている。 時代を過した伊豆・天城山麓の郷里の村に馳せる。故里の集落は小さい宝 平成元年一月某日、 石の固まりのようなものになって、果しなく遠く、静かな、 夕刻、書斎の窓際に立ち、たまたま想いを、己が幼少

燈火は点って行く。 夕刻になると、その小さくて、遠い、宝石の村には燈火が入る。点々と、 やがて、 それに呼応するかのように、 その集落の上に

大きく拡がっている夕空のあちら、こちらでも、 き始める。 星が、 これまた点々と輝

る。郷里の村の星空の、この世ならぬ美しさを、 無数の星がばら撒かれ、 りに、心と瞼に描かせて貰う。 夜が更けると、わが故里の集落は睡り、 光り、 輝き、 時に流れ、 それを押し包んでいる夜空には、 時に墜ち、時に奔ってい 久しぶりに、 実に久しぶ

交錯の中に、故里の夜空のあの独特の美しさの中に、〝平成〞の自分を立 さまをいうと、辞書には記してある。 たせることができたらと思う。 『星闌干』なる詞がある。 闌干とは、 このような星の乱れ、飛ぶ、烈しい 星の光り、 輝き、 乱れ、 流れ、

(『星闌干』より)



星闌干

(詩)

井上靖………2

ご挨拶 井上修一……6

井上靖先生と湖北 明定義人……8

第三回 井上靖記念文化賞 大城立裕氏・伊藤一彦氏に14

井上靖の原郷 伏流する民俗世界 [7] (最終回) 野本寛一……22

い鳩のおしらせ②………35

井上靖未発表資料*4

溟濛の吹雪に (監修・解説

い鳩のおしらせ③………*4*5

祖父母から貰ったもの

平成三十年度 事業報告 井上修一………50

花のカット 鳩のカット 黒田佳子 福井欧夏

奥付のカット 岩永

員にもご就任いただき、 設立運営のためにお知恵を拝借させていただきますとともに、平成十七年からは財団の評議 選考委員長という大役をお引き受け下さっただけでなく、父が亡くなった直後から本財団の 人の伊藤一彦氏という、 三回を迎えました。選考の各段階での皆様のご尽力のおかげで、沖縄文学の大城立裕氏と歌 文学の研究をなさると同時に、 いません。選考委員は篠弘委員長以下、 この中から今回を最後に篠、藤澤の両先生がご退任になります。篠先生は井上靖文化賞の 平成二十八年に旭川市との共催で再出発した「井上靖記念文化賞」は、 ご指導・ご協力をいただいて参りました。 すばらしいお二方に差し上げることができ、これに勝る喜びはござ 職場の日本大学三島キャンパスが父の幼少時代に育った伊豆 斎藤佳典、酒井忠康、辻原登、藤澤全の先生方です。 一方、藤澤先生は井上靖 平成三十年度で第

した。 市や沼津市と近かったこともあり、 両先生にはこの場をお借りして心からの御礼を申し上げさせていただきます。 伝記的な資料調査を実に綿密に実証的に進めて来られま

考委員長は辻原先生にお引き受けいただきました。 原小巻先生にお願いいたしましたところ、お二方とも快くご承諾くださいました。また、選 なお、 両先生の後任を文芸評論家の川村湊先生と女優で日本中国文化交流協会副会長の栗

中核の事業です。元号は令和になりましたが、なにとぞ平成時代に変わらず皆様からご指 選考委員会は半舷上陸に近い形で委員が入れ替わりましたが、井上靖記念文化賞は財団 ・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

令和元年十月吉日

井上靖先生と湖北

明定義人(元高月町立図書館長)

井上靖先生は一九七一年四月に『美しきものとの出会い』の取材で渡岸寺を訪れておられます。渡岸寺観会い』の取材で渡岸寺を訪れておられます。渡岸寺観会い』の取材で渡岸寺を訪れておられます。渡岸寺観会い』の取材で渡岸寺を訪れておられます。渡岸寺国宝維持保存協賛会の二人がそろそろ近くの店で一杯やることにしようという夕方のことだったそうです。二人は芳名禄に書かれた「井上靖」という文字を見ても誰だかわからず、観音堂が所属する向源寺の坊守(お嫁さんのこと)のところに聞きに行って、小説家と知り、「井上靖」の横に「小説家」と書き入れたそうです。「井上靖」の横に「小説家」と書き入れたそうです。「井上靖」の横に「小説家」と書き入れたそうです。「井上靖」の横に「小説家」と書き入れたそうです。「井上靖」の横に「小説家」と書き入れたそうです。「井上靖」の大田では、湖北を中心に琵琶湖周辺の十一面観音を取材してまわられます。『星と祭』の新聞連載が終守る人たちに会われます。『星と祭』の新聞連載が終守る人たちに会われます。『星と祭』の新聞連載が終守る人たちに会われます。『星と祭』の新聞連載が終守る人たちに会われます。『星と祭』の新聞連載が終されている。

た一九八九年八月には、これが最後になるだろうから 改修してはどうか、と提案されています。 宴を開かれました。また、その時、 と、近くの須賀谷温泉に泊まられ、協賛会の人々と酒 年の木之本での講演後の宴会の会場に取材のために入 されています。 寺観音堂で二回、 賛会の人たちと交流を持ち続けられます。 の輪の一人となっておられたそうです。最後に来られ ったら、誰が高名な小説家かわからないくらい、人々 十一面観音像と対座し瞑想の時間を過ごされ、 地域紙の新聞記者によると、一九七八 木之本町の郡民会館で一回、 参拝客用の便所を 先生は渡岸 講演を

町の図書館準備室長として成田市から転籍したので直私は一九九一年一月(先生のご逝去の月)に旧高月



-観音堂境内の文学碑「慈眼 秋風 湖北の寺」除幕式の日、観音堂庫裏で高月町の関係者 とともに (1982年10月17日)

れたものでした。 賛会の人たちは親しみをこめて「井上さんが」と話さ接にお会いする機会はなかったのですが、その頃の協

【星と祭』の新聞連載は、一九七一年五月に始まり間を協賛会の中心であった山岡外次郎氏が井上先生におとた頃からお詣りに来る人が増えてきます。このこと翌年四月まで続きます。渡岸寺の十一面観音像が登場

でつたのは、先生のお言葉のおかげだと思います。 をつたのは、先生のお言葉のおかげだと思います。 を行の身だから、お願いして救っていただくのが良いのです」と先生は折に触れて秘仏公開を説かれました。 のです」と先生は折に触れて秘仏公開を説かれました。 のです」と先生は折に触れて秘仏公開を説かれました。

ありようを問う側面をもっている物語でもあります。死をどう受け止めるのか、という物語ですが、信仰の『星と祭』は、子どもを亡くした二人の父親がその

十一面観音というものに架山が惹かれたもう一十一面観音というものに架山が惹かれたもう一つの理由は、それが集落の人々に守られ、何ともつの理由は、それが集落の人々に守られ、何ともつの理由は、それが集落の人々には感じられなかった。

にいまい土地の人々との関係を、どのように言い現わしていいか判らない。きびしく言えば、信仰という言葉を使っていいかどうかさえも判らなかった。信仰というものはあのようなものであろうった。信仰というものはあのようなものであろうった。だが、ただ愛情深く奉仕し、敬愛の心をもじられない。ただ愛情深く奉仕し、敬愛の心をもいられない。

心が何とも言えぬ優しくきよらかなもので満たさいた女の人たちの顔に現われた優しい笑いを忘れいた女の人たちの顔に現われた優しい笑いを忘れいる観音さまを褒められた時、お堂の隅に坐っている観音さまを褒められた時、お堂の隅に坐って

れるのを感じた。そうした女の人たちの心の中にれるのを感じた。そうした女の人たちの心の避色信仰でなかったら、信仰というものになんの遜色もない別の価値を持ったものであるに違いないの中にれるのを感じた。そうした女の人たちの心の中にれるのを感じた。そうした女の人たちの心の中にれるのを感じた。そうした女の人たちの心の中にれるのを感じた。そうした女の人たちの心の中に

10

持ったことがある。(架山はみはると、それについての対話の時間)

(中略

った人たちが、この世にはまだ居るんだね。――素朴で、優しくて。ああいう美しい心を持――あの人たち、ほんとにいいでしょう。

気持を持った人もあります。 人の中に、優しい心を持った人もあれば、美しいだけ。偉くなろうとか、有名になろうとか、お金だけ。偉くなろうとか、お金になろうとか、お金になるうとか、お金になるがご存じない

のがある限り、心のきれいな人はいるんだろうね。――きっと、そうなんだろうね。人間というも

(『星と祭』朝日新聞社版、一七三~一七四頁)――そうよ、お父さんの回りに少いだけ。

と主人公に語らせています。

せてくれます。
に組み込まれた信仰は、土地の人々の素朴さを感じさまれたのだと思います。確かに何百年も続く習俗の中まれたのだと思います。確かに何百年も続く習俗の中

大使のようでもありました。 大使のようでもありました。 大生とともにお越しになっています。まるで観光が、福田美鈴さん(詩人)はじめ、いろいろな方々がが、福田美鈴さん(詩人)はじめ、いろいろな方々がは、 一個大会には「今里廣記」(財界人)、「相賀徹夫」は、 一個大会にお越しになっています。まるで観光が、 一個大会にお述れになりませた。

続いていくのです。であり、協賛会をはじめとする土地の人々との交流はであり、協賛会をはじめとする土地の人々との交流は面観音は「信仰している観音さま」(ふみ夫人の言葉)小説の取材に終わらず、先生にとって渡岸寺の十一

設置することになりました。 ふるさと創生事業(一九八八~八九年)で町のモニュメントをつくることになり、町が先生にご相談したに合わせて文学碑の碑文を書いてくださることとなりました。一九八八年にはじまる地域総合整備事業債ました。一九八八年にはじまる地域総合整備事業債ました。一九八八年にはじまる地域総合整備事業債素のある図書館と、野外ホールをもつ「出会いの念室」のある図書館と、野外ホールをもつ「出会いのモニなるさとでなりました。

「聖韻」の碑が並んでいます。 図書館の前に舟越氏の「茉莉花像」と先生の詩文

聖韻

て、遠く比良山系を望める美しい町、高月。お坐りになったりしている古い町。琵琶湖を隔ての衆生済渡の仏さまたちが、静かに立たれたり、沢山

明るい広場、町の聖地に、一つの事件が起った。平成の新しい時代を迎えてからのある日、そこの

舟越保武「茉莉花像」(右手前)と「聖韻」の碑(左奥)

先生のおつくりになる詩としては、異色の詩だと思

世界的規模を持つ冥想の町、信仰の聖地、

この日、このようにして生れた。

策の町としての、

新しい時代の、

新しい

高月は、

湖畔散

新しい観音像と申し上げたい、凛とした、

なお姿である。

広場のまん中に、

すっくりと立たれた。

平成の、

近代的

どこからともなく現われ、美しい裸婦像となって、 この町を象徴する花とされている茉莉花の精が、

います。

して書かれた詩といってよいと思います。

高月という土地の風土や人々の暮らしへ

0)

「讃」と

先生は湖北の地では、書く側と読む側の交流ではな

人々の暮らしの中にご自身を溶け込ませる時間を

持たれていたのではないだろうか、

そう思われます。

●井上靖『星と祭』(復刻版)

出版社・能美舎から、美しい装丁をまとって刊行され進」のスタイルで資金を集められたそうです。地元のた。寺院造営などの寄付集めに僧侶が行なった「勧 の舞台・長浜市在住の有志の皆様の手で復刊されまし してゆく物語『星と祭』。井上靖の代表的長編のひと北・長浜の十一面観音様をめぐり、心の平安を取り戻不慮の事故により琵琶湖で娘を亡くした父親が、湖 ています。 つとされながらも絶版で入手困難だった本作が、 小説

四六判上製・636頁・本体2300円 2019年10月刊行 問い合わせ:能美舎 ☎ 080-2079-4692

る人の

鎮

魂

井上靖記念館(旭川市)

(企画展)

井上靖の短編小説の魅力をさぐります。 とする小説を、執筆資料や自作解説とともに紹介し、 れた小説、新聞記者を主人公とする小説、自伝的小説、 井上靖が残した二七〇編の短編の中から、 西域・中国を舞台とする小説、日本の戦国時代を舞台 ○ 「井上靖 短編小説の世界」展 (~令和二年一月十九日) 詩から生ま

小説・随筆を紹介します。 小学校・中学校・高校の教科書に載った井上靖の詩、 ○「教科書」展(仮)(令和二年一月二十五日~四月十九日) い合わせ:井上靖記念館

星と

運

☎○一六六—五一—一一八八北海道旭川市春光五条七丁目

鳩のおしらせ①

第三回 井上靖記念文化賞

大城立裕氏・伊藤一彦氏に

井上靖記念文化賞について

第十五回を最後に中断されていた経緯があります。旭 著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成十九年の またその活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を 年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、こ 入れて制度を再構築し、 れまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された ら「井上靖文化賞」を実施し、 市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二十八 一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年か これからの更なる飛躍が期待される個人又は団 優れた作品や活動実績を有し、 小澤征爾氏やドナルド・

> 家となった足跡や、生涯、各分野の芸術家と交流を持 展に寄与することを期待します。 団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発 遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や 体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しました。 井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作 文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と

行われました。 五月十八日にアー 一年二月十六日に東京都内にて、 第三回井上靖記念文化賞の選考委員会は、 トホテル旭川 贈呈式は、 (北海道旭川市) 令和元年 平成三十

大城立裕(おおしろ・たつひろ)

贈賞理由「戦後日本文学に、豊かな稔りと鋭い問題意 識をもたらし続ける「沖縄文学」を牽引」



受賞のことば

沖縄で書きつづけて

そろそろ認められる時代になったのですね。 ですが、文学は東京だけのものではないということが リカ南部しか書かなかったではないか」と思ったもの 言ったそうです。私はそれに、「フォークナーはアメ とりが「この人は沖縄しか書けないのではないの」と うになりましたが、芥川賞をもらったとき、記者のひ ることでした。いきおい、沖縄だけを書きつづけるよ から、これからの沖縄でどう生きていけばよいかを探 は上海を追い出され、日本を追い出されたという挫折 敗戦の二年後に戯曲で文学をはじめましたが、

ちんと紹介してくださったことに感謝しています。 総まとめで嚙み砕いたつもりでいましたが、その愚直 れ三つの三部作を書き、これで沖縄の歴史を私なりに な仕事をこんど井上靖記念文化財団と実行委員会がき 沖縄の歴史を前近代、近代、戦後と分けて、 それ

受賞のお知らせをいただいたとき、その理由を伺っ

15

だと、感動いたしました。のいかで、北端の北海道から光を当てていただいたののがで、北端の北海道から光を当てていただいたのだということで、私の人生とともに、沖縄という最南端ということで、私の人生とともに、沖縄という最南端ということで、私の人生というに、必要いたしました。

有難うございます。

経 歴

れる 九月十九日、沖縄県中頭郡中城村に生ま

退部に進級して間もなく兵役。敗戦で大学閉鎖/中部に進級して間もなく兵役。敗戦で大学閉鎖/中九四三年 上海の東亜同文書院大学予科に入学。学

縄県の公務員となる一九四六年「帰国。高校教師等を経て、琉球政府/沖

一九五九年 『小説琉球処分』の新聞連載を開始

川賞を受ける 一九六七年 『カクテル・パーティー』で沖縄初の芥

一九八六年 経済企画課長等を歴任し、県立博物館長

第二十二回紀伊國屋演劇賞特別賞受賞加。そこから出品した『世替りや世替りや』が、で沖縄県職員を定年退職。沖縄芝居実験劇場に参

16

一九九〇年 紫綬褒章受章

一九九一年 沖縄タイムス賞

一九九三年 『日の果てから』で平林たい子文学賞

一九九八年 琉球新報賞

二〇〇〇年 沖縄県功労賞

一○○二年 『大城立裕全集』(全十三巻)を勉誠出版

二〇一〇年 日本演劇協会演劇功労者表彰

二〇一五年 『レールの向こう』で川端康成文学賞

主な著書

野』『恋を売る家』、ほかに『カクテル・パーティー』 国』、戦後史三部作『日の果てから』『かがやける荒 部作『神女』『天女死すとも』『花の碑』、近代史三 が成球/沖縄の歴史、民族をテーマとした前近代史三

『真北風が吹けば――琉球組踊続十番』等『対馬丸』『普天間よ』『花の幻――琉球組踊十番』

選評

時代とヴィヴィッドに関わりつつ…… 辻原で

大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受 大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受 大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受 大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受 大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受 大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受 大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受

エイムス・ジョイスの「アイルランド(ケルト)文それに拮抗し、匹敵する存在として常にイェイツやジ「英文学」があり、英文学は英国本土ばかりでなく、私達が、近代小説と呼ぶ「文学」の発祥と中心に

饒さと先進性は語り得ない。学」があった。アイルランド文学なくして英文学の豊

氏の作品群がある。

我が「日本文学」を鑑みても、同じことが言える。
我が「日本文学」を豊かならしめて来たか。そのこと
を、「平成」という時代の終わりと「令和」の新たな
を、「平成」という時代の終わりと「令和」の新たな
がまりのこの時に、私達は振り返り、再検証し、嚙み
がまりのこの時に、私達は振り返り、再検証し、嚙み

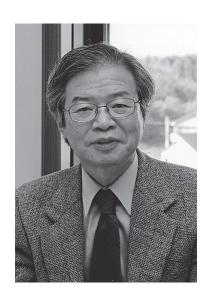
目的を鮮やかに証明するものである。 に関わりつつ、優れた業績を顕彰する、という崇高なに関わりつつ、優れた業績を顕彰する、という崇高な

井上靖記念文化賞 特別賞

伊藤一彦 (いとう・かずひこ)

名誉館長、宮崎県立看護大学名誉教授 歌人、若山牧水記念文学館館長、宮崎県立図書館

贈賞理由「宮崎県を起点に『老いて歌おう』を責任編 集する歌人。全国版十七集に及ぶ」



受賞のことば

18

御礼を申し上げます。 文化財団、井上靖記念事業実行委員会の皆様に心から 難うございます。選考委員の方々、そして井上靖記念 この度は、井上靖記念文化賞特別賞をまことに有り

象とする短歌大会「老いて歌おう」の活動を長きにわ 感じてきましたが、それとともに短歌が心の表形式と るようになりました。その作品を読みながら、高齢者 の協力により毎年全国から約四千首の作品が寄せられ になるのでないかと考え始めたことでしたが、関係者 きる思いを短歌にして表現してもらうことは心の支え です。私は心ひそかに合同歌集『老いて歌おう』を現 て考えたことでした。八十歳をこえて初めて短歌を詠 して大いに有益で有意義なものであることをあらため が表現したい思いをいかに強く抱いているかをいつも 高齢者、とくに要支援・要介護の高齢者に、日々の生 たって私が行ってきたことが受賞理由とのことでした。 んだという人の作品がすばらしいことが稀ではないの 思いがけない受賞の連絡でした。全国の高齢者を対

代の「高齢者万葉集」と呼んでいます。ささやかなこ られる井上靖記念文化賞にふさわしいとお認めくださ ったことは光栄に存じます。 のような宮崎での活動を、素晴らしい目的を掲げてお

短歌を愛読したことを書かれています。『夏草冬濤』 学時代に一度だけ牧水の姿を見、後に牧水の紀行文や が、井上靖氏に「牧水のこと」の文章があり、沼津中 海道行脚日記」に旭川の思い出を記しています。 しく有難い御縁を感じます。なお、牧水は大正十五年 にも牧水の歌が登場します。 –月初旬に旭川を訪れ、作品七首を詠み、紀行文「北 私は宮崎県で若山牧水記念文学館館長をしています その意味でもこの度は嬉

九九六年 九九七年 前短歌大会」を開催 歌集『海号の歌』で読売文学賞 介護施設でボランティアグループと「出

二〇〇二年 ンソロジーを発刊 会」第一回全国大会を開催。以降、毎年開催しア 「こころ豊かに歌う全国ふれあい短歌大

二〇〇五年 歌集『新月の蜜』で寺山修司短歌賞

二〇〇八年 歌集『微笑の空』 で迢空賞

二〇一〇年 二〇一三年 歌集『待ち時間』で小野市詩歌文学賞 歌集『月の夜声』 で斎藤茂吉短歌文学賞

二〇一五~一六年 『若山牧水』で現代短歌大賞、毎日芸術賞、 一行詩大賞 歌集『土と人と星』並びに評論 日本

二〇一七年 西日本文化賞・社会文化部門受賞

二〇一八年 歌集『遠音よし遠見よし』で詩歌文学館 賞。こころ豊かに歌うふれあい短歌集『老いて歌 おう2018 全国版第一七集』を刊行

一九四三年 早稲田短歌会を経て、「心の花」に入会。大学卒 業後、宮崎に帰郷し高校教諭となる。教員のかた 早稲田大学第一文学部哲学科卒業 わら作歌活動を続ける 九月十二日、宮崎県宮崎市に生まれ る

主な著書

歌集『海号の歌』『新月の蜜』『微笑の空』『月の 論『短歌のこころ』『若山牧水』等 夜声』『土と人と星』『遠音よし遠見よし』等、 評

ぬ」などを紹介し、

生徒の悩みの聞き役に徹した、そ

の優しさを認めていた。

り以上の死に方語り終へ少女はおほきためいきつき

20

歌人の域を超えた福祉

弘

賞などの多くを受賞し、なお評論『若山牧水』(二〇 から出発し、すでに迢空賞、詩歌文学館賞、毎日芸術 長として、九州歌壇の牽引車となる。魅力ある風土詠 っている。 一五・六)を書き、研究誌『牧水研究』の編集人にな 日向市東郷村に生家の残る若山牧水、その記念館の館 伊藤一彦氏は、宮崎県宮崎市生まれの歌人。県内の

となるが、授業とケースワーカーを兼務し、その困難 な労苦を詠んだ歌集『海号の歌』(一九九五・九) は読 売文学賞を受ける。 早稲田大学文学部哲学科を卒え、帰郷して高校教諭 かつて大岡信は、たとえば「十通

> 庭』(二〇一八・六)に「励まされつつ選歌せり百歳を 指導をおこなうと共に、ボランティアグループの集め 十七集は二一一九首が収録される。短歌集『老いて歌 れる。第六回から宮崎で全国大会が行われ、 こえたる人の生の香りに」と、選歌する愉しさを詠む。 てきた短歌の選歌や添削をする。最近の歌集『光の ならない。 おう』全国版の年刊は、歌人の領域を超えた福祉に外 て、一年一冊のアンソロジーにまとまり、大会が開か た高齢者の作歌活動を支援する。施設に赴いての出前 れて県立看護大学教授となる一方、以前から始めてい この運動は、さいわい宮崎の県政・市政の賛同を得 教諭定年後は、そうしたカウンセラーの体験が買 昨年の第

第一回受賞者

菅野昭正 (世田谷文学館館長・文芸評論家)

小田 豊 (六花亭製菓株式会社前代表取締役社長)

第二回受賞者

-名誉教授) 徹(東京大学名誉教授・国際日本文化研究センタ

織田憲嗣(東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディ ネーター)

井上靖記念文化賞選考委員会委員

選考委員長

弘 (歌人・日本現代詩歌文学館館長)

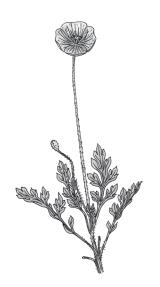
選考委員

斉藤佳典 (北海道新聞社編集局文化部長)

酒井忠康 (美術評論家・世田谷美術館館長)

辻原 (作家・県立神奈川近代文学館館長)

(元日本大学教授·国際関係博士)



野本寬一(近畿大学名誉教授・民俗学)

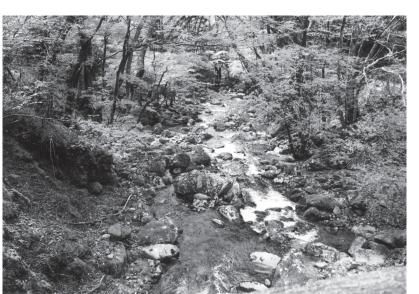
野川 河川探索の水源

水生地によせて

ていた。御成橋の上に立つと、 れている下流の狩野川まで、その大体の川筋を知っ 洪作は湯ケ島付近の上流の狩野川から、沼津を流 自然に洪作の眼に浮かんで来た。 一本の長い青い流れ (『夏草冬濤』)

ということは、 流れて止まぬ一筋の川を源流部から河口部まで知る 流域の人びとの多様な暮らしぶりを知ることに また時に川の流れと人生とのかかわりを思う 自然観・ 環境観の醸成に資するに止ま

幼少期からその五感によって狩野川 できたからである。とりわけ作家の鋭く柔軟な感性は おいて川と様々なかかわりを持ち、流れに沿って幾た 制中等学校時代を河口部の沼津で過ごし、おのおのに 幼少年期を源流部とも言うべき天城山麓で過ごし、旧 延長四六キロと比較的短い流れであったからではない。 部までを知るということは決して容易なことではない。 視角や思索を刺激する。 ことにもつながる。「濫觴」 に刻み続けさせてきたからだった。 るところとも重なる。こうした川のとらえ方は様々な 井上靖が狩野川を熟知するに至ったのは、狩野川が 季節ごとの景物になじん という漢語とその意味す 川の源流部から河口 の様々な表情を心



水生地付近の本谷川 写真(1)

淵の恐怖などで狩野川にふれてきた。馬とばし ていたのである。 の椎茸じい訪問などでも狩野川水系の流れとかかわっ これまでも、 たはずである。 天城隧道行、 時には水源に近いところまで迫っ 粘土探索行、 浄蓮の滝 や棚場

冽な流れが生まれ出る水源を示すにふさわし ると靖少年たちがたびたび探訪した「天城山隧道」 かる白橋がある。そこから上流部に入ると氷室跡があ 谷川に天城大橋が架かっており、車の流れが絶え間な (開通明治三十三年)に至る。隧道の手前に本谷川に架 く続いている。橋を越えると現在の天城トンネルであ 下田方面へ向かう国道四一四号線沿いに「水生 こという東海バスの停留所がある。その南眼前の本た田方面へ向かう国道四一四号線沿いに「水生地 その左手奥が「水生地」である。水生地とは、清 バス停の向かい側から迂曲する旧道の坂道をたど い地名で

部について次のように語る。 さん(昭和十二年生まれ)は水生地を含む狩野川源流 伊豆市湯ヶ島町与市坂から松ヶ瀬に嫁いだ勝又久江 父親が炭焼きをして

まった-焙って醬油をつけて食べたり、おむすびを包んだりし帰った川海苔は、篩の網を使ってのして干しあげた。 味噌濾しに使う小さな籠を持って行った。採って持ちみゃこ たはずである。 た。貴重な川海苔は狩野川台風以後付かなくなってし てはいけない、と注意されていた。川海苔採りには ってもよいが、流れが渦を巻いているところに近づ 海苔採りに出かけたのだが、父に、川海苔を採りに れの中の石には川海苔が付いた。小学生のころよく たので水生地まで入ることがあった。水生地付近の -。靖少年も当然水生地一帯に足を入れてい

忘れていた機能を取り戻す。流れの音、 こと』にはつぎのようにある。「夏のひる下がりなど そうしているうちに、 することがないので、 天井に顔を向けたり、 でもいるかのように静かである。窓に眼をやったり、 は、陽光に照り輝いている風景そのものが、窒息して 靖少年は流れを聴覚で心に刻んでいた。『幼き日の 畳の海を見渡したり、 眼の働きは停止して、耳の方が そんなことを繰り返している。 水車の廻って 他に何も

> いる音が耳にはいって来る」-って狩野川の流れに合するのである -。水車を廻す水は下

> > 24

泳ぎ場の伝承と「ナンガレ」

びがあった。それは様々な作品にたびたび描かれてい るのであるが、 靖と狩野川とのかかわりの一つに夏の川泳ぎ、水浴 ここでは先ず「夏の焰」の中から引

かった。 泳ぎの場所で、わたしたち下級生はみんなN川の方 適当な淵も幾つかあったが、その方は上級生たちの でN川はK川と合流しており、K川の方が川幅も広 K川の支流である N川に 二カ所あった。 部落の外れ 南を占めている字の子供たちには家からの距離も近 へ出掛けたものである。それにN川の方が、部落の くいかにも本流といった貫禄を持っていて、泳ぐに 私たち小学校一、二年の坊主たちの泳ぎ場所は、

大昔の洪水の時山から転がり出た石が一夜にして川 は川筋いっぱいに大小の石が転がっていた。

らした水垢が厚く附着していた。 体を暖めるに手頃な大きさのものもあった。それ以 のもあれば、一人が腹這いになって水浴びで冷えた 上に数人の子供が這い上ることができる程大きいも それがいつ頃のことか誰も知らなかった。石はその その上を踏むと、どんな子供でも滑るようにぬらぬ 下の小さいものは、一面に流れの中に没していて、 現在のようになったのだと言われていたが

澱んでいる淵が二つあった。一つは男の子の水浴び こうしたN川の流れではあったが、そこに多少水の ところに水の飛沫を上げていた。全くの渓流である。 の場所で男淵と呼ばれ、一つは女の子たちの水浴び の石の間をかなり急な速さで流れ落ちていて、到る 青く澄んだ冷たい水の流れは、こうした大小無数 場所で女淵と呼ばれていた。

子供たちの泳ぎの場所が年齢階梯的に伝承されていた 川支流の長野川だと考えてよかろう。ここではまず、 ここに描かれているK川は狩野川本流、N川は狩野

> れていたのである。泳ぎ場の、本流と支流の仕分けは 共同体の子供たちの中の泳ぎ場も伝承を以って定めら が進んでいる現在、何らかの形で補って行きたいこと た者への憧れ、成長願望などを育むものであった。兄 多くの営みの中で、子供たちの上級生、年長者、秀で ことに注目したい。こうしたことは、泳ぎのみならず、 水難防止の効果も果たしていた。 である。男女別の泳ぎ場は時代を反映したものである 姉妹の数が減り、地域共同体の中で極度に少子化

間を、 中に出てくる「ナンガレ」は貴重な民俗語彙である。 名の如く泳ぐのではなくて流れるのである」-とを、村の子供たちはナンガレと呼んでいたが、その 急流でもそれに体を投げ込むことができたが、海とな 毎日のように川にはいっていたので、川なら、 は小学生時代を郷里の伊豆の山村で送っていて、夏は 『夏草冬濤』の冒頭で次のように描かれている。「洪作 さて、渓流とも言える長野川での泳ぎ方については からきし意気地がなかった。渓流の石と石との 流れの力を借りて、下流へと体を流して行くこ どんな

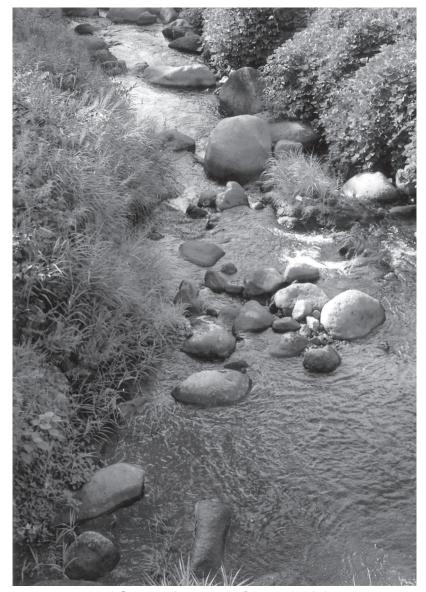


写真③ 弘法大師伝承を纏う独鈷の湯。修善寺川の川中島をなす巨岩が聖性を高める

実際に河童が甲羅を干すのに似ていた」-子供たちは石で体を温めることを甲羅を干すと言った。 ばんば』にはつぎのようにある。 が紫色になるまで流れから出なかった」-んだ。そしていったん水へはいると、寒さのために唇 取り付いたり、 きな奴を見付けて来て、 沈めっこをしたり、 水を浴び、 には次のようにある。「私たちは男淵で午前に一 何回も冷えた体を石に当てて背を干 「ナンガレ」だけではなかった。 だ。何回も淵に飛び込み、泳いだり、 それを水に浮かべて、 いろいろなことをして遊 「洪作たちは何回も 枯れた材木の大 それに 『 し ろ 「夏の

修善寺弘法の縁日

明板には次のように書かれている。「大同二年(八〇れている。湯川という別称は、修禅寺山門前の流れのれている。湯川という別称は、修禅寺山門前の流れのよるとは、「後善寺川がある。この川は桂川とも湯川とも呼ば 広く知られている狩野川の支流の一つに、左岸に注 広く知られている狩野川の支流の一つに、左岸に注



写真② 狩野川支流の長野川。「ナンガレ」の舞台



狩野川・修善寺川の合流点

右の伝承と呼応し、修禅寺では毎年四月二十日、

輿による弘法大師像の奥の院へのお上りが行わ

一日に春季弘法忌が施行される。

二十日午後一時、

春の弘法忌の他に、八月二十一日に秋季弘法忌も行わ

十分までに鎮宿される。一五時、大祈禱となる。この

る春季弘法忌、

四月二十一日の縁日にその祭りの賑わ

^修善寺の弘法さん。 と通称され

靖は少年時代に、

要が営まれ、翌二十一日の忌日にはお下りで一四時三

かかわって湯汲み式も行われる。

奥の院では御は

逮を法を法

ている」

この後この地方には温泉療法が広まったという。

11

わ

父の十数年の痼疾はたちまち平癒したと伝えられ、

ゆる修善寺温泉発祥の温泉で伊豆最古のものと言わ

のこと』の中に描かれている。 の中に身を置いたことがあった。 その様子が 『幼き

13

略)桜の満開の春の祭であった。 祭の現場に辿り着いた時は暮方になっていた。(中 たちに遅れないように半ば駈けるようにして歩いた。 大仁行きの馬車を、 途中で棄てて、 私たちは大人

おいらんを器用に作っている小父さんの顔も眺めな は忙しかった。 ぞれに売っている飴の種類が異っている。子供たち 店もあった。白いぶっかき飴、朝鮮飴、豆のはいっ 店もあれば、 りから小屋掛けの店が並び始め、 な機械も見なければならないし、 さんに向う人々が詰まっていた。 な旅館や店舗が並んでおり、道にはぎっしりと弘法 幼い私たちは修善寺の温泉町に一歩踏み込んだ時 眼に映るものすべてがもの珍しかった。大き 同じ飴を売る店にしても、 色のついたニッキ水の壜を並べている 白い綿菓子が次々に出てくるふしぎ お面を売っている しんこ細工の狐や 店によって、 やがて橋のある辺 それ

ればならなかった。(中略)

セチレンガスの青白い燈火がつき始める。 付 薄暮の立ちこめている境内のたくさんの店には 0 包 おでんの匂 1, 甘酒 の句 ° V 61 か 0)

で突如としてそれらが靖の心に甦ってくる。 この 声、音、匂い 、修善寺弘法、 長じて後、異国をめぐる旅のの人いきれがするほどの賑わ 中

女もミキサアにでもかけられたように動き廻り、 めき合っていた。そこではありとあらゆる物が売買さ ザールを覗いたことがある。それぞれに眼の色と、皮 膚の色を異にした雑多な民族が町の郊外の一画にひし とき、フェルガナ盆地のマルギランという古い町の から湧き起っていた。 時行った祭のようだと言って、 小屋掛けの店の間には、 叫声も、 修善寺弘法 西トルキスタンのウズベク共和国へ行 怒声も、 の縁日の賑わいがいかに強く小 驢馬のいななきも、到るところ 私はこの時、 老人も、子供も、 相手を驚かせた」 同行者の一人に幼 男も、 喚声 0

29

た父の体を洗う少年を見つけ、

その孝心に心を打たれ

(仏具)

桂川で病み疲れ

「川の水では冷たかろう」と、手にした独鈷

七年)弘法大師がこの地を訪れた時、

で川中の岩を打ち、

霊泉を湧出させたと言う。

そして、

大師が父子に温泉療法を教えたところ、

不思議なこと







修善寺・湯ヶ島間の臨時バス二台を

東海バ

春の縁

秋季弘法忌で賑わう修禅寺門前の露店

に刻まれていたかをよく物語っている。

一致すると語った。八月二十一日の秋季弘法忌のこと 「燕が来ると半纏を脱ぐ」という自然暦について語る 昭和六十二年十月二十四日、 私が初めて それはほぼ修善寺弘法の縁日、 *修善寺弘法、という言葉を聞い 九年生まれ)からだった。友一さんは、 伊豆市大平柿木の下山友 四月二十一日と た のは

茸をのせた田舎ズシをつけるならわしがあった。

先に紹介した松ヶ瀬の勝又久江さんは、

四月二十一

の弘法さんには学校が休みになった時代があったと

また四月の縁日には与市坂の実家の親を招待し

の縁日の方に移ってきた。縁日にはサバのオボロや椎 店で財布を買ったことがあった。賑わいは次第に八月

タンキリ飴など様々な店が出た。縁日に露

スシをつけたとも語った。

並んだ時代があった。古本屋、綿菓子屋、 走行させていたという。 和四年生まれ)は次のように語る。 ち春季弘法忌に合わせた両日の夜、 の時までは四月二十日、二十一日の夜、即 日に修禅寺境内と川縁に露店が二十軒ほど 、昭和二年生まれ)によると、 湯ヶ島白壁荘の先代女将、 修善寺町修善寺に住む影山慶治さん

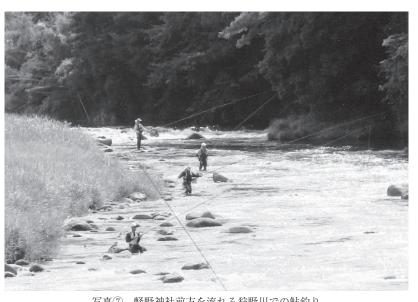
伊豆市松ヶ瀬の軽野神社社叢

との暮らしのリズムの中に長い間、深く定着した信仰 忌が観光事業としての花火大会と強く結びつくのにし ともなっていたのである。時の流れの中で、農のリズ であり、楽しみでもあった。それは、燕の来訪期と重 たがって人びとの修善寺弘法への関心は四月から八月 ムが弱まり、娯楽も多様化した。八月二十一日の弘法 なり、本格的な農作業が始まる前に、 へと移ってきたのである。 右に見る通り、 春の修善寺弘法は狩野川流域で人び 英気を養う節目

品々を扱う店は見られなかった。露店の商品が単純化 ナチョコ いる。 と食物の匂いが混じった複雑な匂いもまた単純化して る店である。靖少年が見たおのおのに珍しく多様な 参拝者も集まり始めていた。出店のほとんどが、バナ ら夏(秋季弘法忌) していると言ってもよかろう。アセチレンガスの匂い 門前にも川岸の路傍にも露店はほぼ出そろっており、 令和元年八月二十一日、修禅寺へ参った。 花火があがり始めると人出も増してくる。春か ・フランクフルトなど横文字の食べものを売 へと縁日の賑わいが移り、 午後三時 露店の

は全く話題にのぼらなかった。

宇田晴子さん 小学校六年生



日ふ」

疾く行くこと馳るが如し。故、

疾く行くこと馳るが如し。故、其の船を名けて枯野とと、また、こと、なる。なる。なる。なられてなり、ないない。 新既に成りぬ。 試に海に浮く。 便ち軽く泛びてとう。

社は狩野川左岸にあり、

社叢には椎や槇の古木が目だ

『日本書紀』応神天皇五年の頃には次の記述があ

「冬十月に伊豆国に科せて、

船を造らしむ。

長さ

伊豆市松ヶ瀬に延喜式内社軽野神社が鎮座する。商品は様変わりしても、祭りは命脈を保っていた。

軽野神社前方を流れる狩野川での鮎釣り

狩野川流域で、作品化や活字化されない様々な景観や

小主題が尽きることのないほど刻まれていたにちがい

釣りが盛んに行われていた。作家井上靖の心中には、

いう地名もある。八月、軽野神社前方の狩野川では鮎

- 。枯は軽であろう。当社の近くには船原と

御成橋の上で

敷包みを持って歩いて行った。

御成橋の近くまで行く

洪作はかみきの家のある場所を思い出した」(『し

にたびたび登場する。「洪作は賑かな表通りを、

風呂

御成橋にて

沼津市、

狩野川に架かる「御成橋」は井上作品の中

待っているよ」、「御成橋を渡る時、四人の少年たちは 狩野川の流れを見降ろした」、「放課後、 橋の上で足を停めて、 ろばんば』)。「御成橋を渡った。三人は御成橋の上で 暗い川の面を眺めた」(『夏草冬

ようになったのは、この頃からである」(エッセイ「川 どかであった。川というものが私の生活に入って来る る。春先きの頃この河の畔りを歩くと何とも言えずの た。町中に御成橋という橋があり、 野川とは異って、ここまで流れ降って来ると、たっぷ ており、町を外れるとその流は海に入った。郷里の狩 りと水を湛えたおっとりとした品のいい河になってい 「中学時代は沼津で過した。町の中は狩野川 必ず橋の上から流れの上に視線を落したものであ 中学校からの帰り が流れ

もある。 た。『夏草冬濤』の中にある次の一文は、靖の 川観」を示すにとどまらず、「河川観」を示すもので 「御成橋」は靖、 「しかし、 青春時代前期のランドマー 洪作が狩野川を日本で有数の美し クだっ 「狩野

> 橋付近の狩野川の流れ、その豊かさ、穏やかさは当時 なかった。御成橋の上に立って、上流の方に眼を遣る ている狩野川のゆったりした姿態の美しさのためでは 工のもので、靖の歩いた橋そのものではないが、 らであった」-のままである。 いう川の、その長い一本の川筋が眼に浮かんで来るか い川であると信じているのは、この沼津の町中を流 洪作にはいつも天城山に源を発している狩野川 現在の御成橋は昭和十二年六月竣 ٤

流部まで歩を進めた。 その後も国内外の多くの河川の河畔を歩き、 けた。旧制高等学校時代には金沢を流れる犀川に親し 靖の人生の中には狩野川が基調音のように伏流し続 九州大学の法文学部時代には筑後川に親しんだ。 時には

川への愛着と跋渉

٢, 、淋しさ、などの擬人的表現で様々な川を、川の表情、川の貌、老いた川、若い川、井上靖の短篇作品に「川の話」がある。読 などの擬人的表現で様々な川を語ってい 川、個性、怒。読み進める



セイがあり、

場での確執、

現代人の背負うものを見ざるを得ない

近代文明の最先端たるダム工事現

河川観・自然観と、

のゆらぎが暗示される。

井上靖には右の短篇と同名の「川の話」というエ

ッ

中に次の一文がある。「私は現在川その

その川が生き生きとして美しいものに感じられる。川

くなっている。やはり川の傍に人間の生活があった時、

の岸で洗濯している婦人たちを配した時、洛東江はふ

いに私には美しく感じられて来るのである」-

井上靖は世界各地の大河や個性豊かな川の河畔を歩

流れと流域の人びとの暮らしや文化に眼を凝らし、

ものは、どんな美しい流れであろうと、そう感動しな

耳を傾けた。

中国の黄河・揚子江・

インドネシアのソロ河、

さらに広くはイン

韓国の洛東

昭和12年竣工の御成橋と豊かな狩野川の流れ

鳩のおしらせ②

・タ

⊙井上靖資料室リニューアルオープン

だたる大河の河畔に立つ。

そして、

心を寄せ続けた西 ・カブール川

と名

・ユーフラテス川・ナイル

域の川、ニヤ河・

ハル

メラン河・チャルクリム河

リム河・クチャ河

・ヤルカンド河、

乾河道にまで足を

人と

場所:静岡県伊豆市湯ヶ島一一七―二 靖作品を読むことも可能です。 を展示しています。 書斎を再現したスペースの他、 アルされるに伴い、井 旧湯ヶ島小学校が市民活動センターとしてリニュ プンいたしました。東京世田谷にあった井上邸のルされるに伴い、井上靖資料室もリニューアルオ 図書館も併設されており、 関連する書籍や資料]

起動の奥深いところに「狩野川」が伏流していたこと

るに大きく資するものとなった。

この超人的な行動の

は論を待たない。

自然のかかわりについての思索を深め続けた。それら

運んでいる。そうした中での感懐や共感を温め、

は様々な作品の中に反映され、作家の人生を豊かにす

休館日: 月曜日、 通常開館時間:九時~十七時十五分 伊豆市市民活動センター二階 年末年始、 特別整理期間

問い合わせ: 伊豆市教育部社会教育課 天城図書館(☎○一六六—五一—一一八八)

(☎○五五八— 八三—五四七六)

35

を重ね、流路の過程と人の生き方の軌跡とを重ねてい

ることに気づく。

川の流れの河口部と、

人生の晩年と

のであるが、テーマは、天竜川の自からなる流路とそ

信濃川・天竜川についての扱いが重い

その中で、

れを阻む佐久間ダムの問題である。作家が内在させる

溟濛の吹雪に

期短篇集』(高木伸幸編、七月社)にも収録された探偵小説「復讐」を本誌に掲載しまし 会会長の高木伸幸氏のご協力を得て資料の確認を再開し、前号では、『井上靖 未発表初 体調不良・ご逝去に伴い中断しておりました。数年前より、別府大学教授・井上靖研究 た。本号より連載を再開し、未発表資料を順次紹介してまいります。 く発表の場を得にくい資料を紹介していくものでしたが、監修者であった曾根博義氏の 本誌第十~十二号にかけて連載しておりました「井上靖未発表資料」は、分量が少な

はありますが、のちの井上作品との関わりが多く見出せる、 れます。井上靖は二十代なかば、京都帝国大学に在学中でした。様々なジャンルで懸賞 小説に応募しており、 今回紹介する「溟濛の吹雪に」は未完の草稿で、 文壇登場以前の暗中模索の時期といえます。原稿用紙六枚と短く 一九三二、三三年頃の執筆と推定さ 興味深い資料です。

衍字・句読点の漏れなどについては、 原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いはそのままとしました。明らかな誤字・脱字 断りなく直しました。振り仮名は原文通りです。

溟濛の吹雪に 荒川

遼

外はしんしんと吹雪いてゐる。

硝子戸が怯えた様にガタガタと音を立て、その都度、細い粉雪が戸の隙間から吹き込んでくる。 暖炉も既に消えて終つて、 時折、幾百の原始鳥の羽搏きの様な、 疎末な山のアパートの一室は墓場の様な冷さだ。 風の怒号が遠く吹雪の心臓から不気味に押し寄せてくると、

ろしい咆喉に聞き入つてゐたであらう。 かも知れない。 れこそ僕自身の心の中を、 荒れ狂ふ風の苦悶が聞える。のたうち廻る雪の苦悩が聞える。一体、幾時間僕はこれらの外界の恐 絶へず血みどろに狂ひ廻つてゐる過ぎし日の恐ろしい記憶の呼び声である 否、 それは風の苦悶でも雪の苦悩でもないかも知れない。そ

薔子さんが硫黄山で凍死してから丁度一年目の冬である。そして丁度あの晩の様な西北の風の強い

吹雪の夜である。

井上靖未発表資料

僕は知らない。 その懺悔の後の心の静謐がたまらなく欲しいのだ。漂渺とした一線の静けさ、そう云つた心の休養が 只語らしめよ、その後の心の静けさの中に無心に眠りこけたい。 たまらなく欲しいのだ。僕の是から述べようとしてゐる告白、それを君がゆるすか、 郁夫君、僕は是以上秘密を覆ひ守つてゐる苦しさに耐へ得られない。何もかもぶちまける、そして ゆるしてもゆるさなくても、どちらでもいいのだ。 僕はすつかり疲れてゐる、 ゆるさないか、 ああ、

38

事は登山家だけが知る事なのだ。アルプスで育くまれた僕等の友情は るまで、連綿として続く筈だつた。若し、 登山綱で結ばれた友情、ピツケルで掘り下げられた友情 只君が君の許婚者薔子さんを僕に紹介さえしなかつたなら -これが如何に強いものであるかと言ふ 山の懐に聖なる殉難者として眠

今思ふにその瞬間から、 は始めて紹介された薔子さんの美しさに、僕の心の汚れが静かにきよめられてゆくのを感じてゐた。 梅の花がしらじらと咲いてあらゆる感覚が冷たくほそぼそと冴えてゆく晩だつた。 僕は僕等の友情の羅針盤を転じて恐ろしい魔海の第一歩に踏み入らせつゝあ

序曲はよそう。僕は薔子さんを愛してゐたと云へばそれでいい。 僕は燃ゆる様な恋情を抱きながら、 君にも薔子さんにも一つの波紋をも与へなかつたと云へばそれでい 独り苦しみつゞけ、僕の僅かばかりの教養が僕を臆病な雄猫 そして薔子さんが硫黄山で眠るま 11

ね。素人向の山だけれど薔子が楽に登れる様にと思つて、 「二月三日は薔子の誕生日だ、硫黄山の小屋で愉快にやる積りだ。 君も勿論つき合つてくれるだらう

昨年の一月の末頃、君は如何にも嬉れしそうにそう言つた。

「硫黄山? よからう。あそこはスロープもいいし、麓には温泉もあるし……」

かいと轟く胸をおし静めながら、僕は極めて平静を装つてゐた。 僕はやつと是丈の事を言ふのが精一杯だつた。薔子さんと一緒にゆく! 兎もすれば荒くなる息づ

ゐた。あの日本一と言はれてゐる雄大なスロープの代りに、蓋子さんが微笑む時みられるあの可憐な た。僕の胸には雪を戴いた神聖で荘厳な山の頂きの代りに、黒潮の様に清澄な薔子さんの眸が映つて 週間だつたらう。それはいつも登山家が山へ行く前のあの大きな懐しい興奮とは全く別種のものだつ 頰から顎へかけての魔法のスロープが映つてゐた。 それからの一週間、スキーの手入れ、リユツクサツク、スキー靴、杖等の整理 -何と嬉れ いい

湯気をすかして窓外をみるといつも静かに粉雪がおちてゐた。 想しても無駄である。只、僕の全生涯を通じて、最も幸福な一日一日であつたと言つておけばいい。 僕等は予定通り三人で硫黄山に行つた。そして山のアパートで過した一週間の楽しい生活を今更追 滑り戯れた体を、三人は三人の兄妹の様に、夕方浴槽に横へるのが常だつた。立ち上る

何のはぢらいもなく薔子さんは浴槽で十二三の少女の様に朗らかに戯れてゐた。

そのふくらみかゝつた乳房はまさに一つの蕾だつた。

少し上を向いた大胆な息きづかい

!

明い夢

みる様なはぢらひ!

だつた。 何たる驚異であつたらう! 僕はその蕾に身も心もすつかり奪ひとられて了ふ自分を見出すのが常

快活に振舞つてゐた。

も抱いていてくれたのだつた。 なかつた。然し、 「こんな愛らしい生物が僕のものだつたら」、 君は大きな愛で、 薔子さんを抱いてゐると共に、 僕はいつも君のこよない幸福をうらやまずにはゐられ 大きな信頼で野獣の様なこの男を

だが、何たる神のいたずらだつたらう。 君は薔子さんの誕生日が明日に迫つた二月二日の朝から風

邪で寝ついて了つた。

「僕の分まで、 薔子のために乾盃してきてくれよ」

君がそう言ひ出す迄、どんなに僕は、 その言葉を待つてゐたらう。 その時、 既に僕の心には恐ろし

い悪魔が巣喰ひ始めてゐたのだ。



怒號が遠く吹雪の

タト 13 し

んと吹雪いてゐる。

ア 助 ょ

り郁夫へ

荒 111

潦

溟

懑

0 吹雪に

號が遠く吹雪の心臓から不気味に押し時折、幾 百の原始鳥の別搏きの様な、

を立て、その都度、 て く る と

硝子戸が

無い粉雪が戸の降間から性えた様にガタガタと音

「溟濛の吹雪に」草稿(1・2枚目)

使用し、六枚目で終わっている。書き出し部分で投げ 出した未完の探偵小説かと思われるが、その短い分量 と推察される。東京文房堂製の四〇〇字詰原稿用紙を 集過程で故曾根博義氏が井上家から発掘した未発表原 の中にも、大変興味深い内容が詰め込まれている。 つである。荒川遼の筆名で、一九三二、三三年頃の作 稿二十二篇(現在は神奈川近代文学館に所蔵)の中の一 十八巻別巻一(一九九五年四月~二〇〇〇年四月)の編 「溟濛の吹雪に」は、新潮社版『井上靖全集』

と、相手役「郁夫」の関係について、「登山綱で結ばまず多くの読者が驚かされるのは、語り手「了助」 とが暗示されている。魚津恭太と小坂乙彦の登山家同 した一節であろう。その二人の友情は、「薔子」を挟 れた友情」「ピツケルで掘り下げられた友情」と表現 んで縺れ、〈薔子の凍死〉という不幸を生ぜしめたこ

> に」の中に、小さいながらも確実な一つの源泉を見出 書いたこの未完成稿を思い出していたのではないだろ 以って明らかにされたと言い得るのである。井上靖は 題を持ち込む設定を好んでいた。そのことが、 興味を持っていた上に、その純粋な人間関係に女性問 ある。しかし、井上靖は予てから登山家同士の友情に ない。また「氷壁」の小坂乙彦の死は、決して恋愛絡 ている。この草稿をそのまま原型と見做すことはでき 起こった、 る。ただし「氷壁」は、一九五五年一月に前穂東壁で 年八月二十二日『朝日新聞』連載)を如何にも彷彿させ セラー小説「氷壁」(一九五六年十一月二十四日~五七 士の友情に、人妻の八代美那子を絡めた後年のベスト すことができよう。 うか。「氷壁」の人物設定と物語展開は、「溟濛の吹雪 「氷壁」の創作にあたって、ナイロン・ザイル事件に みの殺人でなく、あくまでザイル切断による事故死で ついて詳細に調査するとともに、およそ二十五年前に いわゆるナイロン・ザイル事件を材料にし 本稿を

次いで「了助」「郁夫」「薔子」という主要登場人物

期短篇集』(二〇一九年三月、七月社)に収録された「黒 名による草稿、一九三二年作)。また『井上靖 未発表初 発掘の未発表原稿二十二篇に含まれる「了助の日記」 を他作品にも用いているからである。例えば、曾根氏 三名の名前に注目したい。井上靖はこれら三つの名前 ないだろうか。 「了助」と「郁夫」の間において描きたかったのでは に」においても、このような不幸な心の擦れ違いを、 夫殺害の原因となっていた。井上靖は「溟濛の吹雪 な役割を持つ女性が「薔子」と称されているのである。 においては、主人公三杉穣介の愛人の娘として、重要 に文壇デビュー作「猟銃」(一九四九年十月『文学界』) い流れ」では、主人公亮一の策略によって殺害されて*** やはり殺人犯として登場する(二作とも岩嵯京丸の筆 かれている。同じく「黄昏の疑惑」では、「了介」が しまう主要脇役が「郁夫」と名付けられている。さら 「黒い流れ」では、亮一の勘違いによる嫉妬心が郁 そのタイトルに見る「了助」が殺人犯として描

一方、「溟濛の吹雪に」におい て、 ヒロインの名前

> 成が予定されていた可能性もあろう。小説「猟銃」で 告白体と併せて注目したい。本文一行目に「了助より ていた。すなわち本稿は、「猟銃」へ連なる、ささや それぞれの思いを告白していく書簡体構成が用いられ は、薔子を含めた三人の女性が、主人公三杉穣介へ、 そして「薔子より了助へ」、それぞれ告白していく構 郁夫へ」とあるところを見れば、「郁夫より了助へ」、 が「薔子」であることは、この未完成稿で用いられ かな第一歩でもあったと捉えられるのである。

み」と形容しているのである。 盲ひの少女」の姿を「ふくらみかゝつた乳ぶさはつぼ 谷文学館『井上靖展』図録)で指摘しているように、こ たる驚異であつたらう!」と記している。曾根博義氏 た乳房はまさに一つの蕾だつた」と描いた上で、「何 が「未発表初期作品草稿解説」(二〇〇〇年四月、世田 初期詩のそれと重なっている。そこでは「ゆあみせる の表現は「驚異」(一九二九年十一月『北冠』)と題した 本稿では、薔子の浴槽での姿を「そのふくらみかゝつ 初期詩と関連性を持った表現もいくつか存している 加えて本稿では、

新潮社版『井上靖全集』編纂時に見つかりながら、「既 ●井上靖 『井上靖 未発表初期短篇集』

稿と比較的近い時期に執筆した散文詩において、「不 等の友情の羅針盤を転じて恐ろしい魔海の第一歩に踏 発想において、同作は本稿と通じ合っていよう。 具体的な語句の重なりは見られないものの、〈女性の 幸な姉」の「凍死」を知らされた少年が「冷たい地べ そぼそと冴えてゆく晩」に設定している。井上靖は本 死〉を〈冷たい空気の中で咲く梅の花〉と結び付けた は「梅ひらく」(一九三三年七月『日本詩壇』)であった。 たに坐って星空を窺」う様子を描いている。その題名 が薔子の凍死へ関わり始めたその「瞬間」について、 み入らせつゝあつた」こと、つまり、おそらくは了助 一梅の花がしらじらと咲いてあらゆる感覚が冷たくほ

と題した作品も見られる。これらは本稿の内容と必ず 十一月『北冠』)、「吹雪の夜」(一九三〇年六月『焰』) しも関連せず、表現方法は様々である。だが、そうで ている。井上靖の初期詩には、「あらし」(一九二九年 しているように、「溟濛の吹雪に」という題名は、詩 『焰』一九三一年一月号に発表された作品と一致し 最後にタイトルについて。これも曾根博義氏が指摘

> それは困難であると感じていた、いわば青春放浪期に はあっても、 あった井上靖。 医家の長男として医師を目指す使命を負いながらも、 に反映されており、それは本稿も同じだと言ってよい が吹き荒れていたのである。 いずれも当時の井上靖の心境がタイトル 彼の心の中には、 まさに 〈溟濛の吹

井上文学を読み解く様々な手掛かりを含んでいる。今 次第である。 後の研究に大いに資する草稿として、ここに紹介した 未完成稿でありながら、当時の井上靖の心境や後年の 以上のごとく、「溟濛の吹雪に」は、 わずか六枚

- 刻・校訂にあたって 正しくは無題の草稿であるが、「黒い流れ」と題した二 初期短篇集』では「黒い流れ」と題した。同書の「翻 つの原稿を改作した作品であるため、『井上靖 未発表 各作品の特記事項」参照。
- 2 「驚異」「梅ひらく」の本文引用は、新潮社版『井上靖 全集』第一巻(一九九五年四月)に拠った。

(企画展)

●井上靖文学館(長泉町)

発表作品に限る」という全集の方針のため活字化され

○「ふるさとへのメッセージ ば」展(~令和二年三月十日) 井上靖・大岡信のこと

島・沼津編」を館内限定配布しています。 資料から考えます。あわせて、「文豪さんぽマップ三 ようにふるさとを見つめ、表現したのかを七十点もの るさとに持つ井上靖と大岡信の共通点をさぐり、どの 旧制沼津中学(沼津東高校)出身で、静岡県東部をふ

なジャンルで、二十代の井上靖のバイタリティと才気 われる作品群は、ユーモア・ミステリ・時代物と多彩 品を選び一冊にまとめました。雑誌の懸賞小説用と思 なかった戦前の未発表原稿から、読みごたえのある作

村が舞台)も併せて収録しています。

戦後唯一の戯曲 が溢れています。

「夜霧」(家族を疎開させた中国山地の 未発表のまま長くしまわれていた、

ークイベント】

講師・中村童子(元大岡信ことば館学芸員)・徳山加陽 令和二年二月十六日(日)十三~ ○「井上靖×大岡信 共通点いろいろ。そして、ことば」 (井上靖文学館学芸員) 十四時三十分

い合わせ:井上靖文学館

☎○五五— 静岡県長泉町東野クレ 九八六—一七七一 マチスの丘五一五 一五七

篇 集

昭和の文豪 知られざる 二十代の軌跡

2019年3月刊行 問い合わせ:七月社 ☎ 042-455-1385

四六判上製・280頁・本体2400円

祖父母から貰ったもの

木村直子(井上靖孫)

まった。祖父宅がない風景は、私の心にポッカリ穴を り足が遠のいてしまった。 開け、あれだけ足繁く通っていた世田谷からもすっか の撮影に使われた後、二〇一二年に書斎、応接間が旭 の井上靖記念館に移築され、残りは取り壊されてし 東京の世田谷にあった祖父宅は、映画『わが母の記』

開ければ、 関まで石畳が続き、周囲は鬱蒼と茂った木々で覆われ がると突き当りに見える壁。小さな木戸をあけると玄 部まで思い出すことができる。馬事公苑沿いの角を曲 クの匂いが鼻孔をくすぐる。薄暗い階段横のドアを しかし、七年経った今でも、世田谷の家のことは細 家に入ると、 前掛け姿の小さな祖母が台所に立ち、 祖父が毎朝使っていた養毛トニ

幼い頃は、週末となれば、そのほとんどを世田谷で寝 にかこまれて、多くの時間を世田谷の家で過ごした。 した時間がいかに自分の価値観に大きな影響を与えて 教育やその環境について考える時、世田谷の家で過ご 週末の時間が始まる。子供の頃の記憶は今でも鮮明だ。 引き戸の隙間からは原稿用紙にむかう祖父の背中が見 与える指示は京都訛りだ。応接間を横切れば、書斎 泊まりしていたとも聞いている。親戚だけではなく、 のように祖父の存在を伝えることができるだろうか。 いたのかに気づかされる。私たちは曾孫の世代に、ど 私をふくめた十人の孫は、祖父母や周りの大人たち 現在私には、十歳になる息子がいる。息子に与える 親戚一同が集まり、大勢で食卓を囲む賑やかな

幼い頃はそのような環境を特別と思ったこともなく、 出版社の方、時には著名人が訪れる賑やかな家だった。 与えられたものとしてそのまま受け入れていた。

やか」というカテゴリーにいれるにはいささか渋すぎ ったと思うが、子供時代の私にとっては「贅沢」「華 世田谷の家に溢れる文献や調度品は価値のあるものだ という意識が常にあった。実際のところ、祖父は多く は「おじいちゃんは有名で、教科書にも載っているが、 さを覚え、どのように反応すべきなのか困った。私に くなった。質問を受けるたび、どことなく居心地の悪 られ、「井上靖の孫」であることを意識せざるをえな といった勝手な思い込みによる言葉が頻繁に投げかけ 「だから本が好きなのね」「贅沢な家庭なのでしょう」 先生のお孫さんなの?」と聞かれることが多くなった。 畑作りに勤しんでいた。大人になって振り返れば、 、祖母は居間の机で書類の整理をしているか、趣味 時間を書斎にとじこもって原稿の執筆にあてていた 上家は周囲が想像するような華やかな家ではない」 しかし小学校高学年ともなると、周囲から「井上靖

> 味なような気もしたし、それぞれの憶測に任せてしま 子供ながらに、くわしい説明をしたところで何だか嫌 想については、 た。なので、周囲からの質問に対しては、祖父が著名 人である事実は肯定しつつ、 った方が面倒がないように感じていたからである。 失礼がない程度に受け流すことにした。 しかし思い込み先行の感

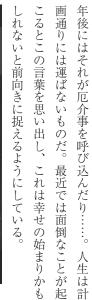
は「不躾な質問なのですが、木村君は井上靖先生の曾先日、学校で息子の個人面談があった。担任の先生 気なくおっしゃったことは重々承知なのだけれど。 は、「あー、きたな」と身構えてしまった。先生が悪 読書が好きな息子と祖父を短絡的に結び付ける発言に 父の関係が知られることになったのだろう。しかし、 弟の卒業した小学校に通っている。そこから息子と祖 書が好きなわけですね」とおっしゃった。息子は私の 孫さんなのですか?」と尋ねられた後、「どうりで読 『あすなろ物語』といった作品に出会うことだろう。 まだ小さい曾孫たちも、いつかは『しろばんば』や

孫に高価なものを与えないという祖父母のやり方は、 集めてきたわけだが、 だった。つまり祖父の机に載っかっているものをかき と自分の距離感を、前向きに体得してほしいと思う。 間がなかったのだと思う。大勢の孫が週末のたびに押 会が催されることもあったが、賞品は鉛筆や原稿用紙 祖父が御機嫌な時に、孫を集めて庭でパターゴルフ大 にしなさい」と言われたこともなく、 しなかったのだろうか。けれども「うるさい」「静 し掛けるわけで、孫の大騒ぎが執筆に差し障ったりは 躾ではなく、単に子供が好むものを買いそろえる時 っかりするでもなく、賞品を喜んで親に報告していた。 のたぐい、豪華なものでもガラスのペーパーウエイト じくお菓子も、お世辞にもおいしいとはいえなかった。 不思議なお土産は、決して子供受けしなかったし、 から高価なものを買い与えられたという記憶も私には 井上家が華美ではなかったと前に書いたが、祖父母 作品に積極的に触れ、世間と「ひいおじいちゃん」 中国や辺境地域の取材旅行で買ってきてくれる だからといって孫たちは特段が 大勢の孫が来れ

> に眺めていた。 祖父は好物の鰻をとり、賑やかな孫たちを上機嫌

ら社会のルールやマナーを学んで欲しい。 与えることはできないが、学校や地域コミュニティ 離感、コミュニケーションの図り方などを教えてくれ たように思う。 かったが、たくさんの大人が出入りする作家の家とい に積極的に参加し、多くの仲間や指導者との関わりか う環境が、結果的に孫たちに礼儀作法や、 忙しい祖父母は、 世田谷の家のような環境を曾孫たちに 孫に対して教育めいたこともしな 周囲との距

みすぎたりするべきではない」という意味である。こ 伝」からの格言だというが、「幸福と不幸は交互にや あざなえる縄のごとし」である。『史記』の「南越列 のは、晩年に感慨を込めてよく口にしていた「禍福は いるのは「言葉」である。祖父の言葉で最も印象深 の言葉の背景に祖父のどのような体験があったのかは 祖父母から貰ったもので、私の中で今も強く生きて 目先のことでむやみに喜びすぎたり、悲し 私も四十代に突入し、実感をもってこ



や不幸が後に非常に役立ったり、喜ばしいことでも数 の言葉に接している。二十代、三十代で経験した苦労



七五三で世田谷の家を訪れた筆者と、それを迎える祖父母

初の一歩を踏み出す私へ、祖母からの応援の言葉であ れている。祖母がこの言葉を色紙にしたため手渡して 小説家を目指す海とも山とも知れない夫との生活であ 大勢の家族に囲まれて幸せであったが、結婚当初は、 りの果てにくる」という言葉を貰った。私が知ってい くれたのは、私が社会人になった年である。 て母としての、祖母の人生の実感がこの一文に込めら ったわけで、辛抱の連続だったろう。妻として、そし る頃の祖母は、人気小説家の妻として采配を振るい、 ったと思い、大切にしている。 祖母には「一生は長くて短い、幸せは辛抱と思い 社会へ最

葉にめぐり会ってほしい。 自分の言葉というものを持てたとするなら、 ので、暇さえあればこの全集を読み返していた。私 広がっているだろうから。 の日本文学全集、 から多くの本に触れ、 の読書体験のおかげである。曾孫世代には、 祖父母から貰ったもので唯一の贅沢品は、子供向 世界文学全集だった。読みやすい 人生を応援してくれる物語や言 その先にこそ豊かな人生が それはこ 幼少の頃 b

事業報告

委員会」の全面的な協力を得て第三回「井上靖記念文 たしました。なお、事業に必要な経費はすべて財団が 化賞」をはじめ左記の諸々の文化事業を運営・実施い 協定」の締結により、文化の振興及び発展に寄与する 負担しております。 目的のために協力して井上靖記念事業を実施いたしま した。平成三十年度も旭川市の「井上靖記念事業実行 本財団と旭川市の「井上靖記念事業の実施に関する

(一) 井上靖を記念する文化賞

推薦を募集し、平成三十一年二月十六日に開催した選 日から報道機関及び文化芸術団体等を通じて候補者の 第三回井上靖記念文化賞は、平成三十年十月二十四

> 井忠康、辻原登、藤澤全)において、作家の大城立裕 考委員会(選考委員長・篠弘、選考委員・斉藤佳典、 特別賞に決定いたしました。 氏を井上靖記念文化賞に、また、歌人の伊藤一彦氏を

対しての評価によります。 おう』を責任編集する歌人。全国版十七集に及ぶ」に 引」に対して、伊藤氏が「宮崎県を起点に『老いて歌 りと鋭い問題意識をもたらし続ける「沖縄文学」を牽 贈賞理由は、大城氏が「戦後日本文学に、豊かな稔

度をまたいでいますが、旭川での冬期の積雪や寒気を た。賞の選考が平成三十年度、 年五月十八日にアートホテル旭川において行われまし 贈呈式、受賞者の講演、 ならびに祝賀会は、 贈呈が令和元年度と年

避けて行われるように配慮した結果です。

(二) 国内外における日本文化の研究助成

○国内

究誌『井上靖研究』の刊行助成を行うとともに、 ムページ管理の助成を行いました。 井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」 に研

○オーストラリア・ニュージーランド 平成十八年に、オーストラリア・ニュ ージーランド



「井上靖賞」受賞者のロイ・スターズ氏

poem and its Japanese model"が受賞しました。 設立した「井上靖賞」は、今年度で第十二回となり、 本の連歌・連句をテーマとした論文 "Renga: European プロフェッサー、ロイ・スターズ(Roy Starrs)氏の日 ニュージーランドの国立オタゴ大学のアソシエイト・ における日本文学の研究奨励のため、シドニー大学に

Old Geology Lecture Theatre にて贈呈式が行われました。 本財団は本賞及び贈呈式実施に関わる助成をいたしま 文化財団・NSW豪日協会の主催で、シドニー大学の 平成三十年十一月九日、シドニー大学・井上靖記念

〇ベトナム

平成三十年七月十八日にハノイのメリアホテルで贈呈 募集開始、翌年の四月末に優秀な論文三点を決定し、 究論文コンテスト」の第三回は、平成二十九年五月に 交流センターと共同で開始した「井上靖賞日本文学研 化の研究振興のため、国際交流基金ベトナム日本文化 平成二十七年度に、 ベトナムにおける日本文学、文



部公房と大江健三郎における人間の人生」

ハノイ人文社会科学大学講師)「比較の観点からの安

チャン・ティ・トゥック(ベトナム国家大学

式を行いました。本財団は本賞及び贈呈式実施に関わ る助成をいたしました。

第一位 ファン・トゥ・ ヴァン (ホーチミン市師範大

十八号の発行に協賛

○井上靖記念館(旭川市

平成三十年七月一日、

『旭川市井上靖記念館報』

○本財団ホームページ

更新と管理をしました。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・

第三位 第二位

「井上靖賞日本文学研究論文コンテスト」の受賞者と関係者

討しております。

すが、『しろばんば』『猟銃』などを来年度に向けて検

なお井上作品のベトナム語翻訳出版助成に関してで

ズムの変態」

大学講師)「村上春樹作品におけるマジックリアリ

れられた巨人』における人生の旅と記憶の遺産」 学講師)「井上靖『敦煌』とイシグロ・カズオ

グエン・タイン・チェン(ホーチミン市師範

52

研究発表「『あすなろう』『三ノ宮炎上』から『あすな

研究発表「『天平の甍』の誤訳と誤読

楼適夷訳を

例に」何志勇氏(大連外国語大学副教授)

議室で行われ、本財団からも参加いたしました。

井上靖研究会の夏季研究会がホテル金沢兼六荘・

会

で開催しました。

○井上靖文学館(長泉町)

常設展示の他に左記の二つの企画展を本財団の後援

した。

〇日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しま

〇平成三十年七月二十八日

(五) 井上靖に関する講演などの開催

関誌『伝書鳩』第十九号を十二月に刊行しました。

井上靖の資料収集・調査研究を行っている当財団機

「井上靖

人と文学以

[風濤]

執筆の頃」

展

平成

(四)近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学

三十年四月十四日~七月八日)

「井上靖と登山」 展

(平成三十年十月十三日~平成三十

行いました。

に関する蔵書・資料

・アル

バム・書簡等の収集整理を

一年一月二十七日)

三十年七月十四日~

十月八日)

|井上靖『海峡』| 展(平成三十一年二月二日~四月七日)

「井上靖

愛蔵品Ⅱ-

-思い出の人と旅から」

展

(平成

年三月十九日)

めの「井上靖講座」も併催しました。

と共催で開催し、

常設展示の他に、左記のような企画展四回を本財団

企画展の見どころの紹介や解説のた

開館四十五周年記念展「井上靖と映画

銀幕を彩っ

月二十一日~平成三十年九月二十五日)

た作品たち」(平成三十年九月二十七日~平成三十

54

〇平成三十年十月二十日 講演「井上靖の登山」井上修一(本財団理事長) 旭川市井上靖記念館

〇平成三十年十一月九日 Lecture Theatre シドニー大学 Old Geology

島由紀夫と昭和時代」。文化プログラムとして、三島 ン・フォー・チャプターズ』の上映。 由紀夫原作の日米合作・米国映画『ア・ライフ・イ 「井上靖賞」贈呈式の後に、受賞者の特別講演「三

〇平成三十年十二月二日

行われ、 研究発表「井上靖『敦煌』と諸関連文献との比較 井上靖研究会の冬季研究会が國學院大學院友会館で 本財団からも参加いたしました。 の描写をめぐって」周霞氏(岡山大学大学

院社会文化科学研究科博士課程後期在学

〇平成三十年十二月十六日

数六八〇編の中から中学の部五作品、高校の部五作品 館理事長)、斉藤佳典(北海道新聞社文化部長)の両氏 が入賞し、井上靖記念館にて表彰式を実施しました。 です。今年度の募集テーマは「あこがれ」で、応募総 は吉増剛造氏(詩人)、審査員は平原一良(北海道文学 全国の中・高校生を対象に実施されました。審査員長 七回「井上靖記念館 旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主 井上靖記念事業実行委員会共催、本財団後援で第 青少年エッセーコンクール」が

最優秀賞

中学校の部:小原誠心「かまじい」(美幌町立北中学校

優秀賞 高校の部:土本翔大「背中」(北海道寿都高等学校一年)

中学校の部:谷川あさひ「馬と共通の時を過ごした

い」(佐賀市・成穎中学校二年)

高校の部:菊池萠珠実「憧れ」(クラーク記念国際高等 学校二年)・大澤花鈴「白になりたい黒」(北海道お といねっぷ美術工芸高等学校三年)

井上靖ナナカマドの会賞

中学校の部:坂田玲「あこがれの時代」(旭川市立光陽 中学校三年)

高校の部:菊池萠珠実「憧れ」(クラーク記念国際高等 学校二年)

〇平成三十一年一月二十七日

書感想文・感想画コンクール優秀作品の発表と表彰式 本財団などの後援で催されました。伊豆市湯ヶ島熊野 会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館(長泉町)・ が行われました。 山墓地で墓参会、天城会館劇場ホールで井上靖作品読 「あすなろ忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員

読書感想文・最優秀賞

小学校の部:熊切優那 「洪作とおぬいばあさんのきず

な」(天城小学校六年)

中学校の部:笠神英花「人との関わり」(筑波大学付属 中学校二年)

読書感想文・優秀賞

小学校の部:塩谷徳啓「もっと知りたい『しろば 校六年) ば』」(中伊豆小学校六年)、杉山水芳「本当の愛情と (天城小学校六年)、 は」(天城小学校六年)、浅田唯愛「洪作になったら」 高橋希空「私の体験」(天城小学

中学校の部:笹尾優那「翌檜という生き方」(鎌倉女 らのメッセージ」(鎌倉女学院中学校二年) 学院中学校二年)、稲田はなの「『あすなろ物語』か

読書感想文・ふるさと賞

小学校の部:浅田悠花「わたしの大好きな湯 (天城小学校六年)

中学校の部:山下夏樹 「痴呆の曾祖母」(中伊豆中学校

感想画・最優秀賞

中学校の部:佐藤碧「しろば んば への道」(修善寺中

学校三年)

感想画・優秀賞

小学校の部:斉藤廉人「天城の夕方」(修善寺東小学校 五年)、芹澤奏太朗「道」(修善寺南小学校六年)

ました。本財団はこの公演に助成を行いました。 んば」が、劇「幼き日しろばんば2019」を公演し のオープニングとして、天城湯ヶ島町民劇団「しろば また午後に「あすなろ忌」及び「伊豆文学まつり」

(六) 特定寄附事業

んでした。 平成三十年度においては、特定寄附事業はありませ

(七) その他

靖に関係する次のような催しがありました。 本財団が直接協力したものではありませんが、 井上

〇井上靖記念館 (旭川市)

平成三十年五月六日、「生誕日無料開館ミニコンサ

ート」ナナカマドの会共催、演奏・リオタンゴ

56

伝』」講師・藤澤全氏(元日本大学教授) 史にすりこまれた美姫のエレジー 平成三十年七月二十一日、文学講演会(第一回)「歴 -井上靖 『楊貴妃

学館理事長) 北海道の女性作家たち」講師・平原一良氏(北海道文 平成三十年九月一日、 文学講演会(第二回)「戦後

師・石本裕之氏(旭川工業高等専門学校教授) 婚記念日』について-平成三十年十月六日、文学講座(第一回)「小説『結 -井上靖短編集『愛』から」講

教育大学名誉教授) せて創作モチーフを探る」講師・片山晴夫氏(北海道 上靖『異域の人』-平成三十一年一月二十六日、文学講座(第二回)「井 『グウドル氏の手套』と関連さ

〇石川近代文学館

井上靖、 平成三十年五月六日、井上靖顕彰「鑑真まつり」 開館五十周年記念「石川近代文学館 中野重治をはじめ、館が所蔵している約七十 作家大集合」

年度常設展)井上靖の詩「半生」の展示 「ゲームと詩歌ー ―遊ぶこと、生きること」(平成三十

年四月二十一日~九月二日)、

後期(平成三十年九月六日

十一月二十五日)に分け、一堂に展示

名の作家全員の第一級資料を厳選し、前期(平成三十

○○回記念特別講演会」講演「父・井上靖を作家にし たもの-平成三十年十月十二日、「井上靖文学を読む会 一 ―孤児と王子」井上修一(本財団理事長)

○掛川市大東北公民館

平の甍』刊行など井上靖の五十歳の一年間にスポット

十歳の一年間」中野重治らとの中国訪問、『氷壁』『天

を当てる

周年記念展「五十歳だった――石川ゆかりの作家、五

平成三十一年一月十二日~三月二十四日、開館五十

周恩来」佐藤純子氏(本財団理事) と」井上修一(本財団理事長)、講演「井上靖と中国と 友好国際交流の会」記念講演「作家になるというこ ※掛川市の松本亀次郎公園には井上靖揮毫の「中国人 平成三十年六月十六日、「松本亀次郎記念-自中

留学生教育に生涯を捧げた人」の碑がある。

〇井上靖ナナカマドの会(旭川市立井上靖記念館内) 平成三十年七月一日、『赤い実の洋燈』五十二号発

三号発行 平成三十一年二月二十八日、『赤い実の洋燈』五十

〇日本現代詩歌文学館

〇法人・古き良き文化を継承する会代表理事)

知られざる井上靖の世界」講師・根本隆一郎氏(NP

平成三十一年三月三日、文学館講座「脚本部時代の

「父 井上靖と私」浦城幾世氏(本財団専務理事)

よる「バスで行く初夏の東海文学散歩」が来館。講演

平成三十年五月十五日、「世田谷文学館友の会」に

井上靖文学館(長泉町)

平成三十年六月十二日~平成三十一年三月十七日、

○NPO法人・旭川文学資料友の会

十一号発行 平成三十年七月二十五日、会報『友の会通信』第二

二十二号発行 平成三十年十二月二十五日、会報『友の会通信』第

○鎌倉文学館

「兵鼓」と創作ノート「義仲関係ノート」の展示 代を読む― 平成三十年十月一日~十二月九日、特別展「鎌倉時 ―古典から現代作品まで」 井上靖の原稿

○鈴鹿市大黒屋光太夫記念館

特別展「亀井高孝 平成三十年十月十八日~十二月二十四日、第十二回 大黒屋光太夫をみつけた歴史学

〇日本近代文学館

「生誕一〇〇年記念 林忠彦写真文学展 平成三十年十二月八日~平成三十一年二月二十三日 文士の時代

> の仕事」のパネル展示 貌とことば」井上靖の肖像写真と原稿「林忠彦氏

○徳島県立文学書道館

文学特別展「有吉佐和子と丸川賀世子-訪問した際の写真を展示 の友情」日本文学代表団として昭和三十六年に北京を 平成三十年十二月十六日~平成三十一年二月八日、 ―二人の作家

○佐倉市立美術館

靖ポートレート展示 より美しく 平成三十一年一月二十九日~三月十七日「美しきを -秋山庄太郎展」秋山庄太郎撮影の井上

○神奈川近代文学館

星・松本清張」井上靖あて松本清張書簡 年四月十七日消印・礼状)展示 平成三十一年三月十六日~五月十二日、 (昭和二十九 特別展「巨

は次の方々でした。 平成三十年度の本財団の役員(理事・監事)、 評議員

(八) 役員

理事長 井上修一

専務理事 浦城幾世

理事 赤岡昌弘 大越幸夫 岡崎正隆 狩野伸洋

佐藤純子 勝呂 奏

監事 樽井里美

評議員 井上卓也 相賀昌宏 表憲章 小西千尋

弘 三木啓史 三好 徹 山口建

(五十音順)

謝いたしますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。 大越幸夫理事が平成三十年十二月四日にお亡くなりに き受け下さいました赤岡昌弘、 なりました。長年多大なご尽力をいただき、心より感 また平成二十九年度に旭川市より理事と監事をお引 本財団設立当初からご指導をいただいておりました 樽井里美両氏がご都合

> き、 によりお引きになられました。ご指導ご鞭撻をいただ 誠にありがとうございました。

す。 なお令和元年度の理事・監事・評議員は次の方々 ご支援のほど、 よろしくお願い申しあげます。 で

理事長 井上修一

専務理事 浦城幾世

理事 岡崎正隆 狩野伸洋 黒蕨真一 佐藤純子

勝呂 奏

監事 大鷹 明

評議員 井上卓也 相賀昌宏 表 憲章 小西千尋

篠弘 三木啓史 三好 徹 山口建

(五十音順

次の方々でした。 いております「井上靖記念事業実行委員会」の委員は また平成三十年度の事業を協力して実施していただ

委員長

赤岡昌弘 (旭川市教育委員会教育長)

副委員長

菅野 浩(NPO法人・旭川文学資料友の会会長)

小林 亨 (北海道新聞旭川支社長)

委員

荒川美智(NPO法人・旭川文学資料友の会理事、 旭

川市井上靖記念館長)

大鷹 明 (旭川市教育委員会社会教育部長)

樽井里美(旭川市教育委員会社会教育課長)

監事

東延江(NPO法人・旭川文学資料友の会理事、 旭川

文学資料館長)

吉田哲也(北海道新聞旭川支社事業担当部次長)

(九) 住所・連絡先

一般財団法人 井上靖記念文化財団

〒一五六一〇〇五三

東京都世田谷区桜三丁目五番九号

電話・FAX:〇三―三四二六―九八三六

60

井上靖記念事業実行委員会 事務局

〒0七0-00三六

旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内 旭川市六条通八丁目 セントラル旭川ビル七階

FAX: 〇一六六—二五—八二: 〇

話:〇一六六—二五—七五五八

図書だより

係する書籍、 二〇一八年四月以降に刊行、発表された井上靖に関 論文、記事等をご紹介します。

書籍

- ○和久田雅之『井上靖の浜松時代と作品の世界 松を中心に、湯ケ島・静岡・掛川』(羽衣出版、 一八年七月) $\frac{-}{\circ}$ 浜
- 〇井上靖『井上靖 一九年三月) 未発表初期短篇集』 (七月社、 $\frac{-}{\circ}$
- ○井上靖『星と祭』(復刊、能美舎、二○一九年一○月)

【論文・記事】

- ○蘇洋「井上靖「明妃曲」論-語」(『関西大学東西学術研究所紀要』二三八号、二〇 一八年四月) 匈奴への憧れの物
- ○高木伸幸「「おろしや国酔夢譚」論-広島大学国語国文学会、二〇一八年六月) モチーフと史料活用の方法」(『国文学攷』二三八号、 井上靖の
- ○インタビュー/井上修一「父・井上靖の戦中日記」 (『Kotoba』三二号、集英社、二〇一八年六月)
- ○蘇洋 曲」、「宦者中行説」、「楊貴妃伝」、「孔子」をめぐっ て」(博士論文、関西大学、二〇一八年九月) 「井上靖中国関係小説研究-- 「楼蘭」、「明妃

- 〇塚本嘉壽「井上靖 常心理学からみた中国古典詩-八年一一月) 靖から晩唐の詩人まで』文藝春秋企画出版部、二〇一 **冗語(擬態語)について」(『異** 露伴、中島敦、 井上
- (『別府大学国語国文学』 六〇号、 楊雯瀟「井上靖『敦煌』論 二〇一八年一二月) -登場人物の象徴性」
- ○李鈺「井上靖「澄賢房覚書」論: 二〇一九年二月) 拠について」(『現代社会文化研究』六八号、新潟大学、 創作背景と典
- ○周霞「井上靖「敦煌」と藤枝晃「沙州帰義軍節度使 始末」-年三月) 学大学院社会文化科学研究科紀要』四七号、二〇一九 「節度使」の描写をめぐって」(『岡山大
- ○趙暁妮「井上靖の『孔子』における孔子像」(『日本 文藝學』 五五号、二〇一九年三月)
- 0 二〇一九年五月) 集『乾河道』を通して」(『阪神近代文学研究』二〇号、 劉淙淙「廃都・楼蘭王国との決別 井上靖第六詩
- 0 魏大海「井上靖、苍狼、 的意象功能」(『アジア文化

=Asian culture= 亜洲文化』三六号、二〇一九年六月)

- ○王羽萌「〈ある兵隊〉の死− 七月) 死』論」(『立教大学日本文学』一二二号、二〇一九年 井上靖『ある兵隊の
- ○劉東波「井上靖の西域物に関する研究」(博士論文、 新潟大学、二〇一九年九月)
- ○田村嘉勝「井上靖と戦争 別と戦後の決意」(『芸術至上主義文芸』四五号、二〇 一九年一〇月) 作品にみる戦争への決



● 『井上靖研究』 第一 八号 目次紹介

論文

藤澤全「小説と絵画のコラボレーション 田女王』と上村松篁『画集額田女王』」 井上靖

劉淙淙「ふるさとへ帰れない人々 性像を中心に」 西域物における女

周霞「井上靖「敦煌」と諸関連文献との比較 の描写をめぐって」 「尉遅

小関一彰「死との対話、生の輝き-小田島本有「『あすなろ物語』論-〈克己〉」 〈翌檜〉 化石 論 梶鮎太の

エッセイ

瀬戸口宣司 「温顔の人 一荻久保泰幸先生のおも いでし

新刊紹介

瀬戸口宣司 瀬戸口宣司「和久田雅之著『井上靖の浜松時代と作品の 世界 -浜松を中心に、 「高木伸幸編 『井上靖 未発表初期短篇集』」 湯ヶ島・静岡・掛川』」

編集後記

り一層軽快に、スキーに乗って配達してくれています。 ストレーターの岩永泉さんによる伝書鳩も、今号はよ これまで『伝書鳩』に執筆してくださった方々、ご 令和元年に『伝書鳩』は二十号になりました。 イラ

後も精進してまいります。 未発表資料の連載を、高木伸幸先生にご協力いただ

協力いただいた方々に、心より御礼申し上げます。今

き、再開することができました。 野本寛一先生の連載「井上靖の原郷」が最終回とな

裏付けされており、圧倒的でした。全七回の連載を読 切り込まれた井上靖論は、長年のフィールドワークに 読者でいらっしゃいました。専門の民俗学的見地から りました。野本先生は静岡県出身で、若い頃から靖の

って伊豆の風土を肌に感じるようでした。

み進めていくと、私も洪作とともに物語風景の中に入

します。 今後とも、 『伝書鳩』をどうぞよろしくお願いいた 西村承子



伝書鳩 第20号

編集者 行 西村承子・西村篤 二〇一九年十二月三日

発

発行所 印刷所 株式会社 東京都世田谷区桜三-五-九 般財団法人 厚徳社 井上靖記念文化財団 井上方